

東日本大震災―森林資源と地域の力で
響かせよう、復興への槌音

木造応急仮設住宅 『板倉構法』が試みる 地域復興への手がかり

筑波大学教授 安藤邦廣先生に聞く

2011年(平成23年)3月11日に発生した東日本大震災はかつてない大きな傷跡を残し、今に至っています。大地震と大津波は多くの生命、そして多くの人から家と仕事を奪いました。続いて発生した東京電力福島第一原子力発電所の放射能事故は、福島県浜通り地方の人々から「ふるさと」そのものを奪いました。

震災から18ヶ月が経った今も全体避難者数は約33万人、福島県浜通り地方で約15万人と言われ、その多くの人々が今も応急仮設住宅での不便な生活を余儀なくされています。

災害時に建設される応急仮設住宅。思い浮かべるイメージはプレハブ住宅ですが、これを木造で建てる試みが進んでいます。福島県は当初の応急仮設住宅建設予定数1万4千戸のうち、4千戸を県内の事業所に発注しました。現在4千戸のうち3千500戸が木造です。これら木造仮設は住民の皆さんからも高い評価を得て、県は2千戸の追加発注を行いました。

今号特集は、この木造仮設住宅を「板倉構法」で建設した例をご紹介します。「板倉の家」を設計し、このプロジェクトの中心を担われた、建築士で筑波大学教授の安藤邦廣先生に案内をしていただきました。



いわきニュータウンの全景。弓なりに配置された板倉の家々。正面高台にプレハブの仮設住宅群が見える。竣工時に撮影（冊子「板倉の仮設住宅建設の記録」より）

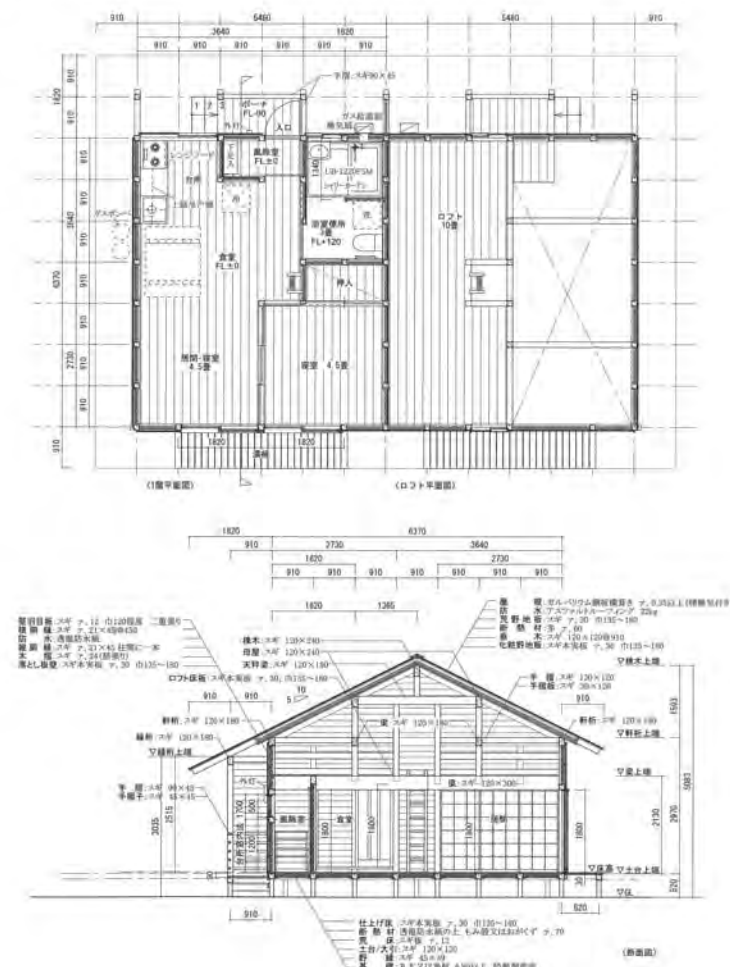
いわき市高久第十 応急仮設住宅

福島県いわき市中央台に「いわきニュータウン」があります。いわき市中央部の丘陵地帯に造成された、福島県内で最大の住宅造成地です。3・11東日本大震災があつてから、東京電力福島第一原子力発電所の放射能事故で、浜通り地方双葉郡の町村から避難を余儀なくされた人たちの応急仮設住宅がここに多く建てられました。

ニュータウン高久地区に車を入れると、プレハブ仮設住宅に混じって、木造の仮設住宅が見えてきました。いわき市高久第十応急仮設住宅です。ここには双葉郡楢葉町から避難された人たちが住んでいます。家々の周りには、住んでいる人が丹精したひまわりなど夏の花が、日差しの中で咲いていました。



図-1
板倉の仮設住宅 Bタイプ[2DK] 10.5坪(34.65㎡)
平面図・断面図 1/100



ていました。
安藤先生と一緒に第十応急仮設住宅の中を歩いてみました。

「安藤先生じゃ、ありませんか」。

通りの向こうから声をかけてきたご婦人がいます。この仮設住宅に住む新妻さんです。安藤先生は、第十応急仮設住宅の設計段階から建築中にかけて、ここに足しげく通われたので、住民の皆さんとは顔なじみのようです。「うちで冷たいお茶でもいかがですか」新妻さんのお誘いに甘えてお宅におじゃまさせていただくことになりました。

新妻さんのお宅は「板倉の仮設住宅 Bタイプ2DK」(図1)です。室内に入った印象はまず「広い」ということでした。ダイニングにつながる45畳の居間、プラス45畳の畳敷きの寝室。高い天井に開放感があり、ロフトも備わっています。



優しく、明るい新妻さん



吹き抜けの高い天井。開放感があります



ロフトが付いています

「板倉とは厚板を落とし込んでつくる木の倉です。古代、中世に穀倉として使われ、近世には庶民の食料や家財を保存する倉として、日本各地で発達しました。その後、町中では木材の不足や防火の必要性から土蔵に代わりますが、森林資源の豊かな山村では今日でも板倉が生き続けています。仮設住宅に、板倉を応用したのは、東北地方の豊かな森林資源という裏付けと、災害時の避難小屋としての板倉の優れた特性を活かすことができると考えたからです。板倉は倉庫ですが、山村や離島では震災や火災、洪水に備えて倉を母屋や集落から離してつくり、そこに食料や寝具、衣類などを備蓄し、いざというときにそこに逃げ込むことで生き延びてきました。何らかの事情で母屋を壊すことがあっても倉は壊すなど言われてきた所以でもあります」。

古来からの構法「板倉」

板倉構法とはどんな構法でしょうか。

その地域材を活用すること、大工職人をはじめとする地域雇用の創出がありました。14の事業所の提案が選ばれ4千戸のうち木造が3千500戸。木造を応募した14タイプを構法別に見ると、在来軸組構法が10、板倉構法が3、ログハウスが1という内訳でした。

板倉構法による木造仮設は198戸建設されました。事業者は会津地方の企業グループで、設計を私が担当しました。『板倉の家』は国産スギを活用し、大工技能の継承と、地域の優れたストックとなる木造住宅をつくることを目的に、私が代表理事を務める『NPO木の建築フォーラム』で開発された構法です」。

スギを太く、厚く、長く、表しで使う

あらわ

「壁を見て下さい。4寸角の柱の間に1寸厚のスギ板を落とし込んでいます。全てスギ材です。スギを太く、厚く、表しで使うことで、耐震性、防火性、居住性を高めることができるのが板倉の家の特徴です。1坪あたり15〜2立法メートルの木材を使います。在来軸組構法の3倍から4倍です。全てスギ材なので大工だけで仕事が進み、コストは一般の木造住宅と同程度に抑えることができます」。

では、板倉の家をみてみましょうか。

先ほど室内でみた壁は、8分（24ミリ）の木ズリに1寸（30ミリ）のスギ板を張ってあります。外壁は同じ木ズリに4分（12ミリ）の未乾燥粗板を2枚、目地を半分ずらして釘打ちしています。乾燥が進んで表面の板にはほど良い隙間ができています。もともと廉価な外装ですが、雨仕舞いにも断熱性にも優れています。スギ板4枚を重ねることで、グラスウールなどの断熱材を使わなくとも、空気層とあわせて断熱性を高める効果があります」。

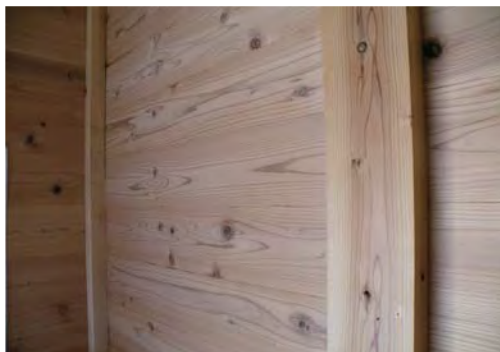


安藤邦廣

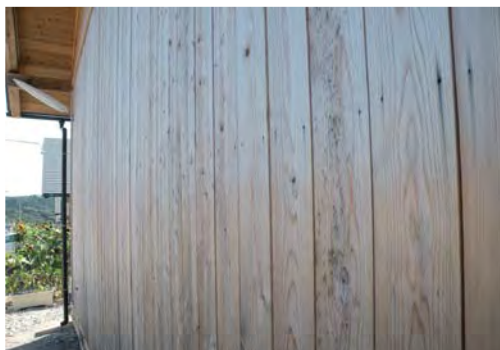
■筑波大学芸術系 教授・建築家
■NPO木の建築フォーラム代表理事
■(社)日本茅葺き文化協会代表理事

.....
1948年宮城県生まれ
九州芸術工科大学芸術工学部環境設計学科卒業
東京大学助手を経て1998年より現職
.....

●専門分野
日本及びアジアの伝統的住宅の研究、木造建築のデザインと技術開発の研究
●著書
「小屋と倉」2010・建築資料研究社（2011年日本建築学会賞（論文）受賞）／「民家造」2009・学芸出版社／「住まいを四寸角で考える」2005 学芸出版社／「住まいの伝統技術」1995 建築資料研究社／「茅葺きの民俗学」1983 はる書房 など
●設計作品
板倉構法による一連の住宅作品、板倉構法による応急仮設住宅（福島県）、板倉構法による復興住宅の提案（宮城県南三陸町）



内壁



外壁

ます。

【床】
仮設住宅の基礎は木杭です。長さ1メートルの杭を90センチ間隔で打ち込み、その上に土台を載せています。床はこれも4寸角の大引を90センチ間隔に配置して1寸板を張ります。その下に荒床を張って間に枅ガラを断熱材として敷き込んであります。枅ガラは地元の農協から無償で提供してもらいました。仮設解体後も処理しやすいという利点もあります」。



上棟式の記念写真。このとき建設にかかわった大工さん、スタッフが屋根に上った。（冊子「板倉の仮設住宅建設の記録」より）



左端が新妻さん、右から二人目安藤先生

木造仮設住宅誕生の経緯

木造の仮設住宅が誕生することになった経緯を教えてくださいませんか？

「東日本大震災に対応した仮設住宅は、当初10万戸以上が必要と予測されていました。災害救助法に基く仮設住宅の建設は、都道府県とプレハブ建築協会の間に協定が結ばれています。これまで、早く大量に仮設住宅を提供できる体制はプレハブ建築協会以外にはありませんでした。しかしこれが岩手、宮城、福島の3県の農漁村地域で広域に及んでいたため、短期間に建設体制を整えることには困難がありました」。

福島県は4千戸を県内の事業所に発注することを決め、その提案を公募しました。福島県は豊かな森林資源に恵まれています。公募の目的には、



冊子「板倉の仮設住宅建設の記録」より

日本家屋の基本は屋根

どの家にも、縁側の外に小さな菜園が作られていて、草花だけでなく茄子や胡瓜、夏野菜を植えているお宅もあります。開け放たれた縁側に座り込んで話に花を咲かせている人もいます。

屋根の角度が急勾配で、玄関側の庇が長く張り出しています。軒下から見上げると垂木も4寸角。下側の野地板との間に隙間がみえます。

「屋根」

屋根の上の横棒は「換気口」です。屋根を二重にして空気層を作っています。1寸厚のスギ板でサンドイッチした空間に断熱材として茅（カヤ）を充填しています。スギの厚板2枚張りりと茅と空気層で断熱性を保持します。茅は断熱性もあるし湿気がなければ耐久性も高くなります。茅は茅葺き屋根の材料ですが、脱石油資源の利用という意味も込めています。

垂木も4寸です。部材をなるべくシンプルにして手間を少なくすることを考えました。材料の値段、大工さんの手間賃、加工賃、これらを考えてコストを抑えようと思えば手間をより少なくする他ありませんから。

軒を深くさしだして北側を玄関ポーチ、南側に縁側を設けて、より開放的なつくりにしました。屋根が日本の家の基本です。風雨や日射を除けて室内環境を安定させる。この基本は仮設であろうと変わりません。屋根をかけると室内に屋根裏ができるので、屋根裏部屋（ロフト）を設けました。平屋ですが屋根裏はこれまでの仮設になかった提案です。衣類や家財を収納して、狭い仮設住宅でも広く開放的に使えます。夏は履き出し窓をあけて縁側から庭に広がる住み方ができます。近所との付き合いも広がります。事前の調査で高齢者の方の比率が高いことがわかっていたので、隣近所とコミュニケーションしやすい空間をこころがけました。

「仮設」ではなく「いおり」

仮設の町並みを歩いてみると、南側に張り出した縁側に、自ら手すりを設けてテラスにした家があります。小さなお子さんがいるお宅かもしれません。家の周囲に置かれた縁台や木製のフラワーポットなどが目につきます。「自由に造作できることは、木造の利点です。工事の残材を使つて、大工さんと筑波大の学生にも手伝ってもらって家具作りのワークショップを開催したんです。今あるのは、その成果品です」と安藤先生。

また声をかけていただきました。「先生、暑いからアイスクリームでもどうです？」渡引さんご夫妻です。

渡引さんのお宅では、ご主人が自作したというロフトに上る階段を見せていただきました。障子を立てる敷居がありますが、仕切りをなくしているので風が通り、こもクーラーは要りません。冬はどうなのでしょう。お二人に冬の住心地を聞いてみました。

「石油ストーブ一つで間に合いましたよ」とご主人。この仮設住宅が竣工したのは昨年夏だったので、天井が高いせいで冬の寒さを心配する声もあったそうですが、縁側の大きな開口からの日差しがある日はストーブなしでも過ごせたとはいいます。浜通り地方は冬の晴天率が高いといえます。

室内は暗くはなく、かといって明るすぎる感じもあります。四阿（あずまや）の日影にいらぐらいの採光率をめざしたそうです。プレハブからイメージする「仮設」にはありません。自然の風と光を感じて暮らす、「いおり」のような住まいがここにあります。

帰路の車中で安藤先生に、仮設住宅の公募に提案した「板倉の家」のコンセプトをお聞きしました。



ほとんどのお宅の周りに花や菜園が作られていました



縁側に手すりを増築した自作のテラス。小さなお子さんがいるのかもしれません



車椅子で利用できるスロープを配した玄関ポーチ



この日、第十仮設の町並みの中でお会いした、筑波大学大学院安藤邦廣研究室の豊川尚さん。人間総合科学研究科芸術専攻の豊川さんは第十仮設を度々訪問し、住宅地における緑地の効果についてフィールドワークしています。

森林資源と地域の力で復興を

一、東北は森林資源と大工職人の宝庫であり、この資源を利用して復興を図ることで、地域振興をはかる。

二、仮設住宅を使い捨てるのではなく、地域のストックとしてつくり、使用後は復興住宅に転用をはかる。

三、できる限り再生可能資源を用いて、循環型社会の住宅モデルを構築する。

四、被災地である東北の農漁村の生活様式の延長にある、開放的で近隣の付き合いの中で暮らす家と町をつくる。



気さくな渡引さんご夫妻。アイスクリームをご馳走になりました



年延長し、原則3年とすることを決めました。しかし、避難暮らしは長期化しそうです。このたびの取材で初めて仮設住宅を訪れて、皆さんにお話を伺いました。傷ついておられる方々とう話したらいいの不安でしたが、皆さんからは気の置けない声をかけてもらい、温かく接していただきました。仮設住宅の暮らしは確かに不便です。でも、人にとって少しでも快適な家であることが、どれほど大切かを知ることができたように思います。

「これまで、災害時のプレハブ応急仮設住宅の造りは、改善点が指摘されても改良を重ねる努力は怠ってきたと言わざるを得ません。

そこにも『板倉の家』で一石を投じたかった」安藤先生はそうおっしゃいました。



帰りがけ、奥様から夏野菜のおみやげをいただきました

〈東京浅草 木具定商店〉

今に蘇れ、木具師の世界

木の温もりを伝える

おりばこ

江戸折箱の工房



「木具師」という職人の仕事があります。今は絶えてなくなりかけている職人仕事です。木具師は、折箱や三宝（月見団子を盛る台、御札、御札盆、御札箱など、よろずの木製品を作ります。それら木製品の多くは一度きりの使い捨て。こうした木の雑器を作る職人はもう数えるほどしかいません。今のうちに合成樹脂が普及する前まで、私たちの身の回りは沢山のさやかな木製の雑器がとりまいていました。折箱もその一つです。いま駅弁の多くは樹脂製の器ですが、その前までは木の折箱でした。その折箱を昔ながらの製法で作っている老舗の工房があると聞き、東京浅草を訪ねました。

創業180年の老舗「並木の木具定」

木具定商店は天保年間（1830年頃）、木具師の定吉（初代）が、当時魚河岸のあった東京・日本橋、現在の三越の向かいに、工房を兼ねた店を構えたのが始まり



エゾマツ

ガリ鉋「紙一重」の職人技

使われるエゾマツの板は厚さ1ミリ。よくしなう材です。先代職人、田中實さんは、これを「ハラズの板」と呼んでいたそうです。ハラズとは「張らず（張っていない）」の意。仕事はまず、このハラズ2枚をデンプン糊で張り合わせるのから始まります。蛇腹になっている裏同士を合せて張り、両面が表になるよう張り合わせ、木の目がいい方を箱の表に使用します。ハラズの板の寸法は2尺2寸の5寸幅などさまざまですが、合板して2ミリ厚の経木です。木具定商店ではこれを「合板」と呼んでいます。「私が子どもの頃は、女性が二人ペアになって終日、合板の張り合わせを手作業でしていました」と信田さん。

次は、この経木にガリ鉋をかける工程。



木具定商店代表、信田喜代子さん。気のけない印象の方です。



かっぱ橋本通りから見える東京スカイツリー



ガリ鉋の刃口に付けられた櫛で作った手製のバネ。



落とし機を使い箱の深さに切り揃える作業。

箱の角の折り目になる部分に鉋でV字の溝を入れる工程です。経木を載せる台をガリ台、鉋をガリ鉋、別名「折り屋鉋」とも呼ばれます。ガリ台には、箱の寸法に合わせて溝を入れるため木取った木型が嵌め込まれます。箱の種類に応じてそれぞれ木型があり、これに合わせて二本の木が鉋を挟む形でレールが固定され、ガリ鉋が正確に溝を彫れる仕組みになっています。これらの木型も、道具も代々の職人さんが自ら作ってきた手製です。



ガリ鉋を操る、田中さんの瞬間技です。



折箱の材料となる経木。よくしなう材です。



工場内に積まれたさまざまな寸法の材料。



代々、職人さんが作ってきた、さまざまな折箱の寸法に合わせた木型。

りと伝えられています。「木具定」の屋号は初代定吉の名前に由来します。明治2年に浅草雷門並木通りに移り、以来「並木の木具定」として親しまれ、木具師の手になるさまざまな木の雑器を作り続けてきました。工場は昭和24年、浅草柴崎町（現在の西浅草3丁目）に移転し、今に至っています。浅草国際通りを合羽橋に折れ商店街から路地に入ると、表の喧騒が嘘のように静かな佇まいを見せる一角に「木具定商店」の工場がありました。迎えてくれたのは代表取締役の信田喜代子さんです。早速、折箱の製造工程を案内していただきました。現在、折箱作りの鍵を握る木具師さんは田中俊和さん、若い方です。先代職人も同じ姓の田中實さん。60年間木具師として働き、平成19年台東区優秀技能者顕彰を受けました。今は俊和さんが、實さんの技を受け継ぎ木具定商店で折箱製造の要を担っています。

木具定商店の折箱の材料には、北海道

から仕入れるエゾマツを使います。でも今は森林計画に基づく伐採量の制限があるので、100%国産材とは言えなくなってきたと信田喜代子さんは言います。「材料の値段は正直言って安くはありません。でも、高い材料で単価の高い製品

になってしまつては折箱は使ってもらえない。だからいつもギリギリの選択。これで儲けようなんて思いもつきません、この仕事、はじめから採算度外視ですね」と笑います。





信田家のリビングでお話を伺いながら、木具定商店のさまざまなアイテムを見せていただきました。テーブル中央に「ECO経木モバイル 木工工作キット」の完成品。



木具定商店の新旧のアイテム。

の溝を彫ってもボキボキ折れたりしない。エゾマツは例えるなら秋田美人。色が白くてもち肌なんです。いい材料が手に入って、いい折箱ができたときは宝石にも思えます。この商いをしている一番うれしいなっと思うときかな」と笑みを浮かべます。

伝統の品揃えから創作アイテムまで

かつて貴族や宮人の食事を盛り付けた白木の盆「折敷（おしき）」が折箱の起源といわれます。手と技をかけて作られるけれど、でもそれは一度きりの使い捨て。贅沢にも思えます。折箱が庶民の器として普及したのは明治20年、駅弁の器として採用されてからです。木の材料が殺菌効果を高め、おひつのようにご飯をふっくらと保湿してくれる折り箱は、駅弁には最適の容器でした。

木具定商店には江戸折箱をはじめ、高級感のある杉折箱や桐箱など、寸法も材料も多彩な折箱のオリジナルアイテムがあります。その他、御札盆や御札箱、鏡

餅や月見団子を盛る三宝。お客さまの要望に応じてさまざまな器を作ります。材がよくしなう性質を生かした「魚折」、正方形3個が入れ子になった「小方（こまた）入れ子箱」など創意に富むアイテム、試作品も作っています。昔懐かしい、食品を包む薄経木やこれと結ぶ松結草（いわいそ）なども扱います。庶民の雑器を提供し続けてきた木具師の老舗ならではの品揃えです。

**木の温もりに、
環境を守るメッセージを込めて**

いま、社長の信田喜代子さんは老舗としてなじみ深い器を提供し続けるだけでなく、木具師の技による新しい木製品の制作と普及に挑戦しています。

そのひとつが、子ども向けに作られた「ECO 経木モビール 木工工作キット」です。経木に切り込まれた魚や動物の形をくりぬいて作るモビールキットです。魚、海獣、草食動物、肉食動物の各シリーズがあり、これを全部作って1本に吊

モバイルキットの包装。喜代子さんのご主人、聡さんが「木と環境について」解説文を書いています。大切なメッセージです。



木材・合板博物館のミュージアムショップで販売
中の「ECO経木モバイル 木工工作キット」



20個1組の単位で、底板とフレームを重ねて底板を貼っていきます。

館長が底板貼りの作業に挑戦しました。最初はなかなか要領がつかめません。

も、鉋の刃の出が狂っていれば「合板」の経木を断ち切ってしまった、溝が浅すぎたりして「折り」がうまくいきません。切れ味が少しでも鈍れば、鉋の刃を研ぐのも田中さんの仕事です。ガリ鉋が削る溝は折り曲げた時、木が切れてしまわないギリギリの深さ、先代の田中實さんはこれを「紙一重」と呼んでいたそうです。室内灯にかざすと溝が透けて見えしました。

折り目の付いた板を今度は箱の深さに切り落として、箱のフレームにしていきまします。このとき、落とし機の刃には僅かな角度がついていて、箱の上となる切り口は山型に、箱の底側にあたる切り口は谷型に切られます。底板を貼るとき谷側に糊がつきやすいようにするため、山型は箱が手に触れても痛くないようにするための工夫です。細やかな配慮です。田中さんが断面を揃えて見せてくれました。

「宝石」の仕上げ

底板にはエゾマツを使い、フタはエゾマツやアカマツのロータリー単板をつかいます。底板とフタは箱の寸法に合せて断裁機でカットします。底板、フタが出来上がれば、いよいよ折箱の組み立て。溝のついたフレームを折り曲げ、マチ部分を糊と両面テープで止めて四角形に仕上げます。木具定ではホチキスなどは一切使いません。環境に配慮し、使用後は土に戻る折箱を目指します。底側の谷型のエッジに糊が塗られ、フレームがライを運ばれてきます。そのフレームを掴



側面の木の目の様子。エッジの精巧さ

新木場 漫歩



東京都東京ヘリポート

「木のまち 新木場」とその周辺エリアで気になる会社、企業、人物、スポットを紹介する新木場漫歩のコーナー。今回は「東京都東京ヘリポート」です。地図を見て新木場の埋立地南端に、東京ヘリポートがあることは知っていました。普段は行く機会のないところ。でも興味はありました。「気になる」スポーツです。「新木場漫歩」の取材のお願いをしたところ、東京都東京港管理事務所港務課ヘリポート係の前澤寛主事が取材日程の手はずを整えて下さいました。



平成23年5月に完成した現在の新庁舎

ヘリコプターの任務・活動を支える 東京の、もう一つの空の公共ターミナル

開港から40周年を迎えた
国内最大の公共ヘリポート

迎えて下さったのは、東京都東京港管理事務所港務課の西山庄一ヘリポート係長と、前澤寛主事のお二人です。東京ヘリポートは現在、東京都の施設として都が管理運営を行っています。西山係長がヘリポートの歴史をかいつまんで教えて下さいました。

昭和39年、辰巳ヘリポート（旧東京ヘリポート）が供用を開始。その後、ヘリコプターの離発着数が増えるにしたがい、5ヘクタールの敷地では手狭になったため、昭和47年6月15日に新木場埋立地（現在の新木場4丁目）に東京ヘリポ

ートが開港しました。現在の敷地は14・7ヘクタール、辰巳ヘリポートの約3倍の広さです。この地が新木場4丁目として江東区に編入されたのは昭和55年のことです。今年には東京ヘリポートの開港から40周年になります。

平成21年に国土交通省東京航空局江東空港出張所と気象庁東京航空地方気象台東京ヘリポート出張所の撤退に伴い、これまで国で行っていた航空保安業務の提供（情報提供業務及び気象観測業務）を東京都へ移管され現在に至っています。

現在、東京ヘリポートには、警視庁航空隊や東京消防庁などの官庁、報道機関や航空会社などの民間会社等、合せて24の機関、会社が基地を置いています。離

発着数は、多い年で年間2万3千回（平成22年実績）を数えます。ヘリポート内では各基地に所属する整備士、給油会社の関係者など約900人弱の人が働き、制限区域内立入許可証（ランプパス）が発行されています。

「管制室」ではなく 「対空通信室」

——最上階の管制室を見学させていただけですか？

西山係長が笑いながら教えて下さいました。「管制室」ではありません。「対空通信室」と呼んでいます。ここで行っているのは、離発着の許可や指示を与え



空から見た東京ヘリポート周辺とその様子（写真提供：東京都港湾局）

昭和46年11月。江東区新木場で東京ヘリポートの整備工事が開始された頃の空撮写真。（写真提供：東京都港湾局）



ると、地球上の生物分布を表現する大きな立体モビールに仕上がります。楽しみながら作って、地球の生態系も学べる学習遊具です。信田さんは、このキットに子どもたちへのメッセージを込めています。本来、植物である木材は環境にやさしい材料であること。木を使うことは森林破壊ではなく、森を維持し地球の自然環境を健やかに保つこと。地球上の生物は沢山の命を分け合って生きていること。喜代子さんはアフリカ旅行に行ったとき、動物たちの棲むサバンナに石油製品のゴミが、分解されず放置されたままになっていた風景を見たことが忘れられないと言います。

このモビールキットには「木の魅力」、「木と環境について」やさしく書かれた解説が付いています。解説文は、東京大学大学院農学生命科学研究科准教授の信田聡さん、喜代子さんのご主人が書きました。「ECO経木モビール 木工工作キット」は、「東京の伝統的工芸品チャレンジ大賞」「TASKものづくり大賞」、2011年には「第5回キッズデザイン賞」に輝いています。

木の良さを活かし、身近に木の温もりを感じられる生活シーンをもっと増やし



モビール完成のイメージ

ていきたいというのが、信田喜代子さんの願いです。老舗、木具定商店の新しいチャレンジが続いています。

人から聞いたさやかな思い出を紹介

します。

ときは昭和35年。東京オリンピックはその4年後のことです。ところは下町、江東区の商店街。精肉店の店先に立つて子どもが店のご主人に声をかけます。

「おじさん、経木をちょうだい」

「あいよ。二枚でいいかい？ 明日は遠足だね。お代はいいよ」

おじさんは二枚の薄経木に結び紐の松結草（いわいそ）を二本付けて手に持たせてくれた。

当時、肉屋さんも魚屋さんも商品は薄経木に包んで売っていました。薄経木は湿気を吸って風通しがよく、遠足などお弁当のお結び包みにも良く使われていました。ふだん家庭で使うことのない薄経木はお店で分けてもらうのが常で、今にして思えば気前のいい話です。でも確かにそんな時代がありました。

あの頃、木の温もりは人の温もりも運んでいたような気がします。

木具師の技を今に引き継ぐ、木具定商店が目指すのは、そんな木と人の温もりの時代を、今に蘇らせることなのかもしれません。



を集約して情報提供を行い、安全運航を支援するのが対空通信室の役目です」。

最上階の対空通信室に案内していただきました。全方向が大開口のガラス窓で、通信室は想像以上に視界が明るく、エプロンの向こうに東京湾が青々と広がり、湾内にヨットが何艘も浮かんでいます。風をはらんだ白い帆が目に見え、さわやかです。

通信室では松本隆さん、河原田健治さんのお二人が職務中でした。お二人は一般財団法人航空機安全運航支援センター江東事務所の職員で、松本さんは江東事務所所長です。同支援センターは、かつて航空機の管制業務等を行っていた職員OBで構成され、全国18箇所の空港で飛行場情報提供業務等を受託しています。気象情報の提供は一般財団法人日本気象協会が受託しています。

河原田さんがパイロットと交信しています。英語で内容はよく聞き取れません。「話しているのは、もっぱら風の情報です。ヘリコプターは風を正面から受けて離着陸しますから、風向きを数字で正確に伝えます」。スピーカから聞こえてくるパイロットの声は女性です。「近年は女性パイロットが多くなりましたね。もうすぐ1機着陸します」。河原田さんが

北東の方向を指差しました。黒い小さな点が次第に大きくなり、青色の機体がヘリポートに近づいてきました。通信していた声の主は警視庁航空隊の女性パイロットでした。

また1機、今度は西側からヘリコプターが接近してきました。豊洲の高層マンションのある方向です。

大震災の救援基地として 届いた感謝状

3・11東日本大震災のときはヘリコプターがずいぶん活躍しました。離発着が混雑することはないんですか？松本さんにお聞きしました。

「ありますが、管制業務ではないので待機を指示したりすることはありませ

ん。離発着は基本的に順番どおりですが、待ち時間の無駄を出来るだけなくすように心がけています。ヘリポートの情報圏内は半径3マイルの円内ですが、東京ヘリポートは羽田空港の空域とも一部重な

っているので飛行高度など空域が制限されています。近年は、西側に300フィート前後の高層建築が密集し始めたので、騒音にも特別配慮しなければなら

い。騒音にも特別配慮しなければなら

い。騒音にも特別配慮しなければなら



やさしい語り口の西山係長



3.11震災時の様子語る松本さん



若く気さくな前澤主事



前澤主事から構内図でヘリポート施設の概要を教えてくださいました



一息ついて、くつろぐ河原田さん。



対空通信室でパイロットと交信する河原田さん



着陸態勢の警視庁航空隊の「おとり」



昭和47年6月15日。東京ヘリポートが運用開始。運輸省（現国土交通省）東京航空局江東空港出張所（写真左手前）と東京都東京ヘリポート管理事務所（写真右奥）（写真提供：東京都港湾局）

んでいました。騒音で苦情が出るかもしれないと気を揉んでいましたが、感謝のお手紙を事務所宛てにいただきました。今までになかったことです。ヘリコプターの活動の公益性を理解していただけたことは良かったと思います」。

防災拠点への整備

救急患者の搬送、救助、救急用資機材の輸送。山岳地などへの建設物資輸送、薬剤散布、報道取材など、ヘリコプターの機動性は幅広い分野で活用されています。東京ヘリポートは、これらヘリコプターの任務・活動を支える、国内最大の

公共ヘリポートとして、全国の公共ヘリポート離発着数のおよそ2分の1を担っています。

3・11震災の時は、新木場一帯は液状化被害で一部機能マヒとなりましたが、ヘリポートには影響はありませんでしたか？西山係長にお聞きしました。

「幸い液状化などの被害はありませんでした。しかし、震災の経験を教訓に、3年計画でエプロンの地盤改良工事を始めています。このヘリポートは、災害発生時『緊急輸送ネットワーク』の航空輸送基地として指定されています。防災拠点としての機能を確保し、より安全に利用できるようにするための工事で、平成

25年度に完了する予定です。ヘリコプターの運航を支援するヘリポート管理者の責務です」。

ヘリポートの外観を撮りたいんですけど、どこかベストポジションはありませんか？

「それなら、対空通信室から、正面に夢の島緑地公園の遊歩道が見えるでしょう？あの真ん中のベンチが定番の撮影ポイントですよ。ここを見に来る人はそんなにいないんですが、この役割をもつと伝える努力ももっとしなくてはいいかもしれませんね」。西山係長はそう言いながら見送って下さいました。

みなさん、ありがとうございました。

《後記》

東京ヘリポートが、新木場埋立地の供用開始と歴史を同じくし、今年40年目を迎える、新木場でも最も古株の施設であったことを初めて知りました。ヘリコプターはさまざまなシーンで活躍していますが、ヘリポートはその華々しい舞台裏を支えています。取材中、ヘリポートの役割をもっと広く周知したいですねと言ったら、前澤寛ヘリポート係主事が、事業広報のパンフレットと、WEBサイトを刷新する案を作成中であることを教えて下さいました。

後日、前澤主事から、東京ヘリポートの事業と歴史を紹介するホームページを新たにしたので、ぜひ「木と合板」誌上でも紹介して下さいとお電話とメールをいただきました。URLは下記のとおり。読者の皆さん、ぜひアクセスしてみて下さい。新木場のもう一つの顔が見えてきます。

（博物館スタッフ 長谷川麻紀）



博物館からのお知らせ



■ クリスマスツリー植林 苗木販売 申込受付中！

『クリスマスツリー植林』は、どなたでも参加できる植林プログラムです。
12月に北海道「イコロの森」からの植林の苗木をお届けしますので、クリスマスツリーとしてご利用ください。クリスマス後は苗木を「イコロの森」へ戻し、春を待つと植林祭に参加することができます。詳しくは、ホームページをごらんください。



申込期間：平成24年10月1日(月)～11月20日(火)
※12月1日より順次発送予定



■ 第1回ウッドマスター(基礎)講習会を開催

林業や木材産業に携わっておられる企業の人材育成を側面から支援することで将来のビジネスに役立てて頂くことを目的とし、企業様を対象に「第1回ウッドマスター(基礎)講習会」を開催することになりました。

開催日：10月15日(月)～19日(金)

■ 第4回「木と合板」写真コンテスト応募作品展を行います

10月18日(木)より、新木場タワーの1階エントランス奥ギャラリーにて展示を行います。これより11月17日(土)までの約1ヶ月間、一般の方々に投票をしていただきます。この結果を踏まえ、博物館関係者によって構成されます選考委員会による最終審査を経て、入賞作品が決定いたします。新木場タワーにお立ち寄りの際には、ぜひご投票ください。



昨年の作品展

■ 編集部からのお知らせ／一読者からのお便り

本誌前号(17号)の「新木場漫步」は、木材樹種の話としてウェスタンレッドシダー(米スギ)を紹介しました。これを読まれた一読者の方から、「同材の長所だけが強調されている気がします。木材に用いる樹種には使い道に応じてそれぞれ長所、短所もあるので、木材知識の普及をめざす木材・合板博物館は、樹種それぞれの短所等も含めた正確な情報提供をここがけるべきでは」とのお手紙をいただきました。

ご指摘の点を出来る限り活かした当館展示、情報誌の制作に努めてまいります。貴重なアドバイスをありがとうございました。



木材・合板博物館のご案内

アクセス 東京メトロ有楽町線 JR京葉線 東京りんかい高速鉄道
新木場駅 → より徒歩7分
東京メトロ東西線 東陽町駅 → よりバス
②のりば/木11甲・木11折返 新木場一丁目バス停 より徒歩1分

開館時間 10:00～17:00 (最終入館時間16:30)

入館料 無料

休館日 月曜日、火曜日、祝日 年末年始

※都合により開館日・時間を変更することがあります
※幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。
※団体での見学は事前にお申し込みください。

新木場タワー3・4F



表紙：「ECO経木モバイル 木工工作キット」株式会社木具定商店「木の国工房」の製品(本誌「新木場漫步」参照)

木と合板 第18号 2012年10月15日発行 定価:525円(消費税込)

発行：特定非営利活動法人 木材・合板博物館

〒136-8405 東京都江東区新木場一丁目7番22号(新木場タワー)

TEL.03-3521-6600 FAX.03-3521-6602 Eメール: info@woodmuseum.jp

編集：「木と合板」編集委員会

制作：株式会社デジタルアート



特定非営利活動法人 木材・合板博物館

<http://www.woodmuseum.jp>

木材合板

で

検索

クリック!!